震災復興における大学の役割



石巻専修大学学長　坂田 隆

石巻専修大学は東日本大震災の最前線にあって、大学の建物にはほとんど被害はありませんでしたが、北上川を隔てた石巻の市街地は水没し、帰れなくなった学生や教職員が人によっては１ヶ月以上学内で暮らしました。本学の学生・教職員の約１/３が被災者です。石巻圏域で、震災直後に建物が無事で自家発電施設がうごいていたのは女川原子力発電所と石巻赤十字病院と石巻専修大学だけでした。そのため、震災当日から大学は避難所となり、３月１５日には全国で最大規模のボランティアセンターが開設され、大学の芝生はボランティアのキャンプ場になり、数百張りのテントがならびました。その後も、日赤の救護所、石巻赤十字高等看護学院、宮城県東部振興事務所など、様々な施設を学内に引きうけました。「大変だったでしょう」と、よくいわれますが、選択肢はひとつでしたから、判断は簡単でした。

発災直後の３月末の学部長会で「やられっぱなしは面白くない。」という発言があって、被災地の復旧と復興のための活動をすることにしました。のちに「復興共生プロジェクト」という名前がつきました。その中で、「いつもは研究や調査をするのだが、今回は研究や調査をされる側にもまわろう。」ということも決めました。ですから、調査や講演のご依頼には積極的におこたえしています。

そうした中、震災の年の私立大学連盟の学長会議で本学の活動を報告する機会をいただき、それを聞いてくださった赤松徹眞学長先生から「龍谷大学で話をするように」と声をおかけいただきました。2011 年の 10 月 23 日に龍谷大学深草校舎でお話をさせて頂きました。そのあとのパネルディスカッションで、僧侶として被災地をまわっていらっしゃった先生が「おとむらいは、生きている人のためにするんやで。」と学生諸君におっしゃったのが、いまでも頭のなかに響いています。仏教を背負った大学の「姿」を拝見させて頂くことができました。

その後、龍谷大学のボランティアセンターの皆様ともお付き合いをさせて頂くことになりました。長い歴史にささえられた奉仕活動の伝統と、学生を表にたてる運営、それを可能にする職員の方々の情熱と専門性には圧倒されました。本学ではようやくボランティアセンターをつくる方向にすすんでいますが、多くを学ばせていただいています。また、本学の学生たちが龍谷大学を訪問させていただいたり、龍谷大学のボランティアのみなさんが石巻にお出でいただいたりと、のぞましい交流が始まっていますが、ぜひ大切につづけたいと考えております。これからもよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。